京都大学全学共通少人数セミナー　平成２１年度前期

科目名：　創造性とは何か？
担当教員名：　村瀬　雅俊
場所：　基礎物理学研究所
日時：毎週火曜日　第５時限
E-mail: murase@yukawa.kyoto-u.ac.jp
Tel: 075-753-7013:　Fax: 075-753-7010

第１１回

こころの老化としての「分裂病」－創造性と破壊性の起源と進化－＊１（その２）

２　現実の二重性　－「内」と「外」の対立的共存－

対象を「外」から観測すると、「現象」の「外面的観測による理解」は可能であるが、「本質」は見えない。逆に、対象の「内」に没入すると、「本質」については「内面的観測による理解」が可能であるが、「現象」が見えなくなる。こうした「観測のジレンマ」が生じてしまうのは、物理学者のパウリが述べているように、《情報を失わなければ情報が得られない》からである。その理由は、主体と客体によって、空間が「内」と「外」に二分され、階層化されているために、二つの現実が、それぞれの階層に存在するからである。こうしたジレンマを解消するために、こころは「内」と「外」との対立を共存させる生命機能の一つとして誕生し、進化してきたのではないだろうか。もし、そうであるならば、人類史を調べることによって、「こころの起源と進化」が単なる偶然の出来事として起こったのではなく、必然であった経緯をたどることができるのではないだろうか。

残念ながら、私達現代人が「こころの起源と進化」を現在から過去へと体験的にたどることは困難である。しかし、現代を生きる二つの民族－すなわち、文明化された私達自身と文明化されていない未開民族＊４－を比較することによって、この困難を克服することができる。そこで、ユングの『タイプ論』（２５８頁）（１７）の中から、ブッシュマンの生活から取材された悲惨な実話を引用しよう。

《あるブッシュマンに幼い息子がおり、未開人の特徴であるが彼はその息子を猫かわいがりしていた。・・・ある日このブッシュマンは魚釣りから怒って帰ってきた、一匹も釣

れなかったからである。いつものように息子は喜んで跳びはねて彼を迎えた。しかし父親は息子をつかむなり首をひねって殺してしまった。もちろん彼は後になって、息子を殺したときと同じように取り乱して、息子の死を嘆いた。》

私は、この話を読んだ時、この話が遠く離れた未開の世界で起こった「外面的な現実」であるばかりでなく、私自身のこころの深層に隠された「内面的な現実」をも見せつけられる思いがして衝撃を受けた。そして、同時に、現代社会に日常的に繰り返されている悲劇と根本的に相違ないとさえ思われた。こうして私は、現代の精神病が理解できないどころか、未開時代にすでにその起源が痕跡程度のレベルで存在していたのではないか、従って、そうした「異常な状態」は、逆に、ある種の拡大鏡の役割として、私達の日常の心理を解明しうる理想モデルではないかとさえ思うようになった。がんを生命の理想モデルとすることで生命を捉えることができたように、ある心理現象は、他の心理現象によって捉えることができれば、意味づけが可能となり、その心理現象を理解することができるに違いない。

そこで、まず、ブッシュマンの悲劇の原因となる心理現象を探ってみよう。ユングによれば、このブッシュマンの愛情は典型的な「自己愛」（すなわち、客体の中の自分への愛）であり、《このケースは客体がそのときどきの激情と同一化する事を如実に示している》のである。この場合は、「主体と客体の同一化」によって、すでに存在していた「内」と「外」の対立を基盤とした階層が消失することに問題がある。その結果、こころの発達が止まり、「現実」の認識が出来なくなるのである。

それでは、ブッシュマンの事例のような「主体と客体の同一化」が、未開人の特徴として何故よく起こるのだろうか。未開人の精神状態は、ユングによれば、思考や意志などの機能が未分化であって、意識的な考え方ができない。その理由は、未開人は前意識的であり、自分で考えるのではなく、彼の無意識の中で考えがなされているからである。しかも、未開人の無意識は、野生動物の本能に近いために、新しいものへの恐怖と伝統へのこだわりを見せる。未開人の正常な心的態度では、客体は、そのありのままの存在形式によって働きかけ、主体は客体との接触によって呼び起こされた感覚的知覚を基準にしている。決して、短絡的なかたちで「主体と客体が同一化」していない。逆の言い方をするならば、主体と客体の差異があるということに、無意識（本能）を基盤とする「こころの起源」の必然性を認めることができると私は思う。もちろん、現代人から見ると、こうした未開人の自然認識のあり方は、原始的な型を取っているように思えるのであるが、それは現代人が意識的な認識のあり方に慣れ親しんでいるからである。ユングによれば、未開人が自然を認識する際は、無意識的なこころの出来事を「外」の出来事として捉える「投影」を基にしている。例えば、太陽が昇り、そして沈むのは、こころに住んでいるはずの英雄の運命を示しているに違いないと言う。こうして、無意識の内容は、自然現象に映し出される「投影」を通して意識される内容となり、その時にはじめて認識されるのである。ところ

が、激情に陥っているブッシュマンが我に復る際にも、また、「投影」を通さざるを得ない。ここに、悲劇が「現実」のかたちを取る原因があると言える。

注：「投影」とは、主体に意識されない「内容」が無意識的に客体の上に移され、その結果、その「内容」が客体に属していると思う現象である。実は、この「投影」という現象は、現代人においても、原始的な型のなごりとしてしばしば現れる。こうした「投影」は、その「内容」が主体に属するものとして「意識化」されると、たちまち消失する。そのために、「投影」は、いつもあらかじめなされており、後になってはじめて認識されることになる（１８）。

ここで、論考を先に進める前に、一つの心理現象から別の心理現象が予見可能であることを示しておきたい。「主体と客体の同一化」が一つの危険を伴うことを述べた。それならば、「主体と無意識の同一化」も危険を伴うに違いない。これが、ユングが「原危険」と名付けた「自分自身の世界に巻き込む」ことなのである（１８）。この「原危険」というのは、自分が誰であるかということさえ忘れる程で、「無意識そのものになった」未開人は無軌道な感情に流される。いずれの場合にしても、対立の中庸を行かずに一面化することが危険なことがわかる。

こうした一面化を、回避する手段として機能していたのが「儀式」なのである。（ここに、「宗教の起源」があると私は思う。）実は、この「儀式」には、別の機能面もあった（１９）。未開人は、意識的な意志の努力ができず、あらかじめ「意欲する気分」にならなければ、あるいは「意欲する気分」にしてもらわなければ、意志を働かせることができない。そのために、「儀式」が未開人を「意欲する気分」にするために機能していたのである。すると、「儀式」の定着が「こころの進化」を必然的に促し、その結果、意識が発達する基盤を与えたと考えることができる。（ここでいう「気分」の原始的なかたちが、すでに動物行動にも見られることを次節で述べたいと思う。）

前述した現代に生きる未開人の心理現象をもとに、文明化「以前」から文明化「以後」の人類史を推論してみると、次のように要約できる。文明化「以前」は、「外」なる自然現象の運動を「投影」というかたちで眺めることによって、イメージの創造や活用を行っていた。この「外」の自然運動に依存したイメージ活動が、数千年の人類の歴史を経て文明化した「以後」に、意識の「内」へと入ってきたのである。それは、《「外」の世界を「内」へと取り込む過程》に他ならない。現代人に見られる「投影」も、その「内容」が主体に属するものとして「意識化」されるとたちまち消失することからもわかるように、文明化への歴史とは、実に「意識の成長・発達過程」なのである。こうして、人類の努力は、意識を発達させ、強化することに向けられてきた。例えば、自然の中にその神秘を解く鍵がすでに存在しているにもかかわらず、私達にはなかなか理解できない。その理由は、それを見ようとする私達の意識が未発達だからである。従って、自然現象に潜む本質を理

解するための個人的な努力である「意識化の過程」は、人類史における「意識の成長・発達過程」と対比し得るのである。こうして、こころにおいても成立しうるヘッケルの法則に意味づけが可能となる。

ところが、本質的に恐ろしいのは、すでに「こころの発達」のはじまりそれ自体に、「内」と「外」の対立が含まれているために、その対立を高次で統合していくようなこころの創造的な自己発展の影に、対立間での分断や、一方が他方に同一化するといった破局が生じてしまう危険がつきまとうことである。ここに、私が「こころの老化」と総称する精神の病的状態としての破壊性ーすなわち、こころの解体過程ーの起源がある。もちろん、こころも生命と同形であることを考えるならば、生体において認められたさまざまな階層レベル、構成分子において「からだの老化」が起こるように、「こころの老化」もさまざまなパターンを取り得る。しかし、そうした多様性は、同一過程の異なる展開に過ぎないのである。実際に、このような解体には、自らが苦しむという「主観的」なかたちで現れる場合と、自らの自覚が麻痺してしまい皆で誤りを犯すという「客観的」なかたちで現れる場合がある。

「主観的」なかたちの解体の一例として、無意識は、自分が生み出したものーすなわち意識ーを再び飲み込もうとする（１９）。この段階で、文明化によって獲得してきたこころの階層性が損なわれることになる。その結果、階層間の分断が起こり得る。あるいは、こころの一部が「外」といくつかの心的過程が互いに限られた結びつきしかない場合にも、こころの分裂が生じてしまう。これは、未開人の特徴として認められるように、同じ一つの個体にいくつもの魂が宿るという状態である。この状態においては、それぞれの心的過程が新しい状態の中で断片化してしまうのである。

また、逆に、「客観的」なかたちを取る破壊性の危険として、現代人の個人の意識が、社会的・集合的意識と同一化するという例があげられる（２０）。客観的事実は、必ずしも正常とは限らない。そのために、結果として生じてしまう「熱狂」を、後になってしみじみと反省するというのは、歴史に繰り返し現れる事実である（２１）。

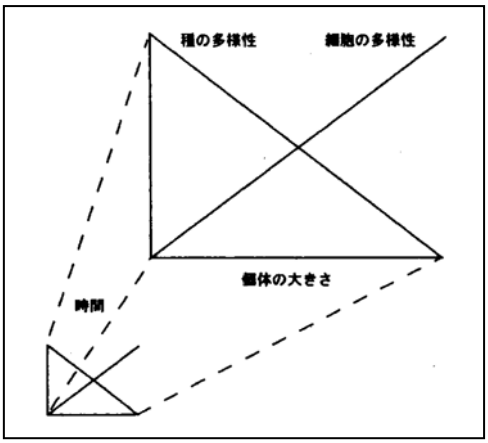
３　「内」と「外」の多様性　ー逆相関関係の拡大ー

これまで述べたように、対象を観測する際、「外面的観測による理解」にしても「内面的観測による理解」にしても、それぞれ「現象」と「本質」のいずれか一面だけしか捉えることができないという「観測のジレンマ」がある。そして、こころは、こうしたジレンマを解消するために「外」なる世界を「内」へと取り込みながら構造化する過程として進化した。また、こころの系統発生は、縮約した形でーすなわち、図１やピアジェの「数の体系化」の図が示すようにー個体発生においても繰り返される。こうして、こころによる対象の理解が進めば進む程、こころによって生み出された概念の体系もまた、「外」の対

象を「内」へと取り込みながら成長し、体系全体としてはすっきりとした形で整備される。その様相を、物理学者のアインシュタインは次のように述べている。

《物理学は、進化の途上にある一つの理論的な思考の体系になっているものであり、・・・進化がつづけて行なわれていく方向は、論理的基礎の単純さを増大していく方向になっています。この目標により接近していくには、論理的基礎が経験的諸事実からますますかけ離れたものになっていくこと、そしてまた、・・・われわれの思考の旅路は、たえずますます苦労の多い、より道程の長いものになっていくことに甘んじなければなりません。》（アインシュタイン「物理学と実在」、２５１頁）（２２）

このアインシュタインの言葉から、私は、「進化」に伴ってある種の逆相関関係が生じることに気づいた。こころが生命の一機能として進化したことを考えると、こころと生命は、同形の過程として捉えることができるに違いない。そうであるならば、生命の起源以来の進化をたどり、原始的な生命体が今日まで多様化してきた事実をありのままに受け入れることによって、生物総体としての多様性の意味を探ることができるのではないだろうか。そこで、生物種を、個体の大きさごとに、種の多様性（「外」の多様性）と、個体に含まれる細胞タイプの数（「内」の多様性）とを、進化という時間発展に対してグラフ化してみると図２ａのようになる（２３）。このグラフから読みとれることは、逆相関関係という本質的な特徴を保ちながら、進化という時間発展とともに多様性が拡大したということである。生命の起源以来、原始細胞は、細胞分裂によってその数を増やしながら多様化し、個体の大きさも増大した。ここで特徴的なことは、《個体の大きさが増大するに伴って、「外」の多様性は減少し、逆に、それを補償するように「内」の多様性が増大している》ということである。つまり、《生物の進化において、「外」の多様性が「内」なる多様性へと取り込まれた過程》と言えるのである。この過程は、《意識の進化において、「外」の自然が「内」なる自然として取り込まれた過程》と同形である。しかも、それは、アインシュタインの言う「学問の進化」とも同形である。



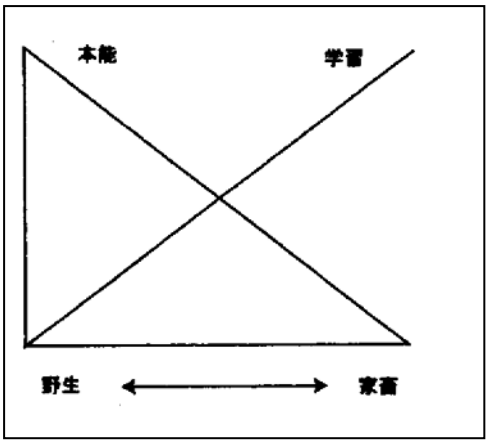


図２ａ：「進化」に伴う多様性の逆相関関係　ｂ：野生種と家畜種に見られる本能と学習の逆相関関係

次に、逆相関関係の意味を考えてみたい。この関係の意味は、物理学者のボーアが粒子性と波動性を統一しようとして提唱した「相補性」（２４）であることを私は指摘したい。「相補性」というのは、《同一事象の異なる側面として対立する見方が共存し得る》ということである。先に指摘した「観測のジレンマ」も、「内」と「外」という対立を相補的にしか統一できないことから生じるジレンマであると言える。このように考えてみると、この逆相関関係は、思いがけないところで、さまざまなかたちをとって現れるに違いない。

そこで、生物総体として眺めた視点から、群れをつくる社会性動物に視点を移してみよう。もちろん、その代表例が人類であることは言うまでもない。社会性動物を考察してみると、群れをつくる以前の個体にとっては、一つの「外」なる世界であったものが、群れをつくった以後には種「外」の世界と種「内」の世界に分化することに気づく。（こうした視点は、個性化過程を捉える上では欠かせないことを指摘しておきたい。＊５）そのために、《一方の世界への適応は他方の世界への不適応》というジレンマが新たに生じることになる。この状況を概念的にグラフ化したのが、図２ｂである。以下の論考では、この図の意味づけを行いたいと思う。

前節では、「観測のジレンマ」を解消する道筋としてこころの進化に注目した。集団を構成している人間同士がコミュニケーションを行う場合に、「観測のジレンマ」を解消するためには次の点が重要となる。すなわち、《主観的内容を他者に伝えるためには「外」に現れる形式を発見しなければならず、その形式が他者に伝えられた時に、自分と同じような主観的内容が他者の「内」に生じることが要求される》ということである。これが、ユング（２５）やローレンツ（２６）の言う「シンボル」なのである。ユングは、《シンボルが「存在する」ためには、シンボルを「生み出す」機能とシンボルを「理解する」機能が必要》と考えている。もちろん、シンボルは、こころと同形の一つの過程－すなわち、創造性と破壊性という両義性を兼ね備えた過程－として捉える必要がある。私は、ここに「宗教シンボル」の起源を見る思いがする。もちろん、両義性があるが故に、このシンボルが創造的過程であることを止めて固定化し、そのために破壊性を引き起こす危険が常にある。そこで、まず、人間以前の社会性動物におけるシンボルの固定化について考えてみよう。

ローレンツによると、《社会性動物の本能行動がシンボルの原始的な例》なのである。つまり、客体としての認識対象と、主体における認識過程は区別されないばかりでなく、外界から相対的に独立することになる。その結果、その行動様式はますます誇張され、さらに形式化された意図的動作へと分化することになる。つまり、対象として、種仲間を持つ場合、対象に作用を及ぼすために情報の発信システムを作り上げても、対象側において、その信号を特異的に選択することのできる情報受信システムの発達がなければ、情報伝達機構として機能しない。そのために、こうした情報の発信システムは、受信システムと同時に、いわゆる「共進化」するのである。こうして、種「内」でのみ意味を持つ本能行動が形成される。この本能行動は、系統的に相同性がある。言い換えれば、原始的には殆ど

兆候でしかなかった運動が反応者側に生じる興奮の質と、作用者側に運動を起こさせる興奮の質とが、しばしば同じだということである。そのために、反応特異的な興奮は、まさしく「伝染的に」作用することになるのである。ローレンツが名付けた、この「気分伝染」は、人間を含めた社会性動物すべてに生じる基盤である＊６（２６）。なぜなら、社会性動物では、社会の成員がほぼ同時に同じ「気分」－例えば、食事や睡眠、移動、逃避－に浸れば、その動物にとってきわめて有利な行動へとつながるからである。

注：例えば、細胞を例として考えてみよう。細胞がバラバラで存在している時と、集団を形成している時とでは、何かが変わるはずである。実際に、ゾウリムシでは、一匹で泳いでいる時よりも、集団で泳いでいる時の方が、環境変化に対する適応的な学習が早くなるという現象が認められる（２７）。現象の上で、このような変化が起こる理由は、細胞レベルの「気分伝染」が働くからである。つまり、集団の形成以前は、個別に情報分子の放出と取り込みを行っていた細胞が、集団の形成以後は、同一の分子を共有できるようになる。その結果、全体として統合化がなされ、適応性が格段にあがるのである。

ところが、こうした情報発信と受信のシステムは、種「内」において、特異的に強調されて発達するために、そのシステムは種「外」の環境世界に対しては適応的とは言えない。例えば、魚類のカツオは、外海の多くの生物がそうであるように、群れをつくって行動している。餌が少なくなると、運動刺激に対する反応の閾値が低下し「敏感化」する（１４）。これは、カツオの生存にとっては意味のある変化である。カツオが餌になる小魚を二、三匹でも食いつこうものなら、他のカツオも狂ったようにあたりかまわず食い尽くす。人間は、この生態を逆手に利用して、餌のついていない擬餌針を使ってカツオの一本釣りを行っている。

ローレンツは、適応について一つの逆説を述べている。それは、適応した構造の持つ働きは、ある程度の自由度の喪失という犠牲を伴うということである。これまでに成し遂げられてきた適応過程が、原則的に定着する強制力となってしまうからである。実際に、ホイットマンは、家畜化された動物は洞察によって問題を解くが、野生型の動物にはそれができないことを示した。その理由は、家畜化された動物では、固定的で本能的な行動基盤が消失することによって、柔軟な行動ができるためである（２６）。人類も野生状態から家畜化することによって、「本能」を抑圧することができたからこそ、新たな環境認識のあり方として「学習」が可能になったと考えられる。

ここで、再び、家畜化以前には全く予期できなかったジレンマが生じる。動物の本能行動は、ある刺激によって起こるが、家畜化によって、その行動が触発されない期間が長い程、閾値は低下する。そして、最終的には、ローレンツが「真空運動」と呼んだ、外部刺激なしに突発的な行動が生じてしまうという状態になる。家畜動物では、こうした行動様式の頻度と強度が大きく変化する。チュウガエリバトの場合、逃避の行動様式が肥大し、痙攣発作のような病的状態となる。また、古くて原始的な行動様式－例えば、摂食や交尾

ーは肥大し、新しく分化した家族の団結や社会性はなくなる傾向が認められる（２６）。人間は、家畜化した動物である。従って、動物において認められた異常行動は、当然、人間においても生じてしまうのである。